

研 究 分 野	資源管理	部名	資源管理部
研 究 課 題 名	多元的資源管理型漁業推進事業 イカナゴ資源調査		
予 算 区 分	漁業調整費 (国1/2)		
試験研究実施年度・研究期間	H.15 ～ H.16		
担 当	伊藤 欣吾		
協 力 ・ 分 担 関 係	水産振興課		

〈目的〉

イカナゴの資源状態や生態を調査することによって、下北半島西部沿岸と津軽半島東部沿岸で策定されたイカナゴ資源管理計画に基づき、津軽海峡西部全体での広域的な資源管理をめざす。

〈試験研究方法〉

(1) 産卵状況調査

平舘村と佐井村の地先において、イカナゴの産卵状況を調べた。

(2) 稚仔分布調査

津軽海峡西部～陸奥湾の海域 11 調査地点において、2004 年 1 月 19 日～4 月 14 日の期間、新型稚魚ネット水平 10 分曳とボンゴネット往復傾斜曳を行い、イカナゴ稚仔の分布密度を推定した。

(3) 漁獲量調査

当海域の 7 漁協において、日別の詳細な漁獲量と金額を調べた。

(4) 海洋環境調査

漁場の海面水温、佐井村地先水深 25m 地点の底層水温を観測した。

(5) 夏期の分布調査

2004 年 8 月 26 日、9 月 10～11 日に津軽海峡海域において試験船青鵬丸のオッタートロールによる海底曳を行い、イカナゴの夏期の分布状況を調べた。

〈結果の概要・要約〉

当海域（三厩村～陸奥湾～佐井村）におけるイカナゴ（当歳魚）の漁獲量は、図 1 に示したとおり、1995 年に 15 年振りの豊漁となったものの、2002 年以降大きく減少した。

イカナゴの漁況予測はウオダス等を通じて発表した。予測の方法は、ボンゴネットによるイカナゴの稚仔分布密度と漁獲量との間に認められた正の相関関係（図 2）を基本とし、夏期の成魚の分布密度（図 3）、水温の年偏差および産卵状況から総合的に判断した。2004 年漁期の予測は、3 月の稚仔調査時点では前年を下回ると発表した。4 月の稚仔調査で稚仔の採集量が多かったため漁況予測を前年並みに修正して発表した。結果として漁獲量は前年の 39%に減少した。4 月に多く発生したイカナゴ稚仔は漁獲加入しなかったと考えられた。ふ化から漁獲加入までの生残率と餌料環境の関係を明らかにするため、2002 年から動物プランクトンの分布調査を開始したが、2004 年は過去 2 ヶ年に比べて、動物プランクトンの春季ブルーミングが 1 ヶ月早かった。このことが、4 月に発生した稚仔が漁獲加入しなかった要因と関係があるものと推察された。

資源管理を推進するため、2004 年 6 月 1 日に下北半島西部沿岸と津軽半島東部沿岸の合同のイカナゴ漁業検討会を、前年、前々年に引き続いて開催した。これまでの調査の結果から、当海域においてイカナゴが再生産されている事、両半島沿岸で漁獲されるイカナゴは同一資源の可能性が高い

事などを報告し、資源を持続的に維持管理して漁業経営の安定を図ることを協議した。具体的には、単価が安くなる大きさの魚体になったら獲らないこと、親魚を獲らないことが挙げられた。今後も、資源予測と漁獲状況の推移を総合的に判断し、漁期終盤に漁業者の話合いにより終漁日を決める検討会が継続されることを望みたい。

〈主要成果の具体的なデータ〉

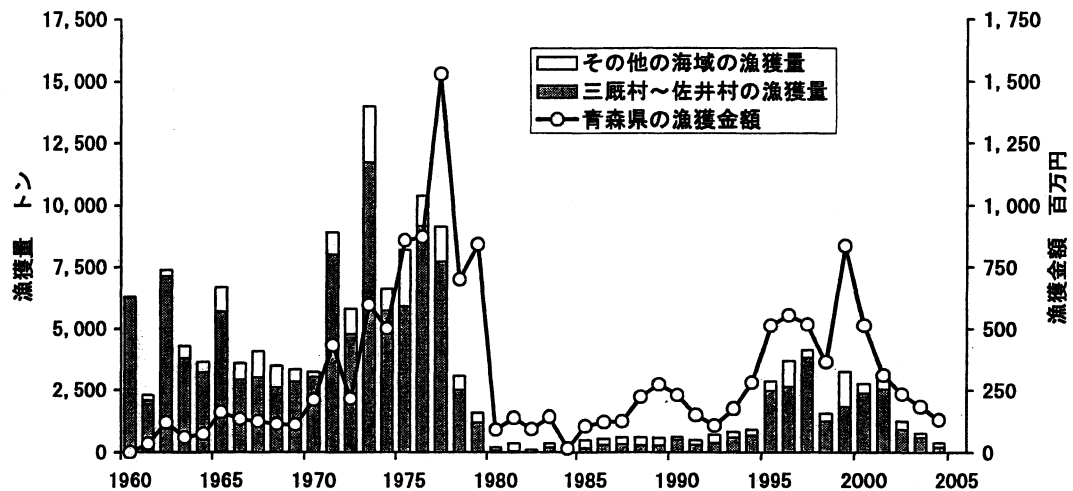


図1 青森県におけるイカナゴ（当歳魚）の漁獲量と金額の推移

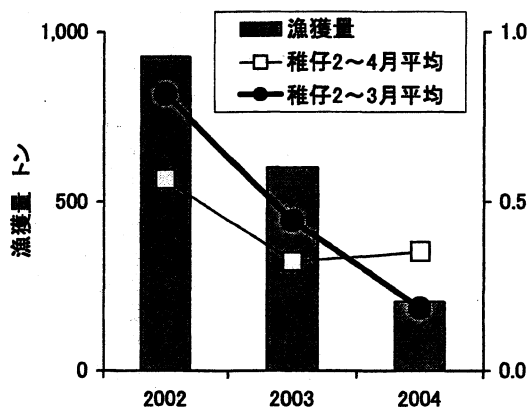


図2 ボンゴネットによるイカナゴの
稚仔分布密度と当海域の漁獲量の推移

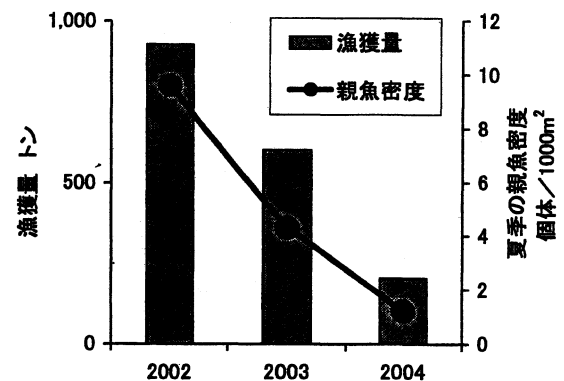


図3 オッタートロールによるイカナゴの
夏季成魚分布密度と当海域の漁獲量の推移

〈今後の問題点〉

資源予測を行う上で、夏期における成魚の分布域を大畑沖以外の海域で発見する必要がある。また、ふ化から漁獲加入までの生残率と餌料環境との関係を明らかにする必要がある。

〈次年度の具体的計画〉

本事業は今年度で終了。平成17年度は資源回復計画県単魚種として協議検討される。

〈結果の発表・活用状況等〉

青森県（2005）平成16年度多元的資源管理型漁業推進事業報告書。（印刷中）